

高校友達と私
ーフシー
紹介文

グループB-6
1812164 ハンヒョンスク

今回の授業のテーマである「私にとって大切なコミュニティ」を考えた時、家族や友達・韓国の留学生たちなどのいろんなコミュニティが思い浮かんだ。最初には今一番近で力になっている韓国の留学生たちについて書こうとしたが、遠くから力になっている友達のことを考え、コミュニティを変えることにした。

私が大切だと考えて紹介しようとする友達は高校1年の時から今まで一番仲良しの友達である。高校に入って初めて付き合った友達は今になって少しは人数が変わったが私を含めた5人はいつも一緒であった。高校2年生になってクラスがバラバラになってもランチや夕食の時間にはいつも集まってご飯の食べたりおしゃべりをした。そして卒業の後、みんな違う大学に進学することになり、特に私は家から離れ遠くにある大学に進学したのでみんなに会うことがさらに難しくなった。いつもスマホのアプリで会話をして遠く離れているという感覚は少なかったが、約束とかを決めている友達を見ると少しぐらい寂しくなるのは当然のことだったが、その気持ちを理解してくれたのかはよく知らないけれど、みんなが集まって遊んだ後には私にその時にとった写真やその時に語った話題について話してくれた。それは留学している今でもあまり変わらなかった。

もともと私は先に連絡をしたり、相手から来る連絡をつなぐのがよくできなくて連絡が切れる人が多い。それは留学に来ている今もっとひどくなって、韓国の友達から来るメールに何日間も連絡をやってない日も多かった。それでもいつも先に連絡をしてくれる友達がいてここからの生活での悩みも少しは軽くなれたと思う。

インタビュー相手

私がインタビュー相手とした選択した人は「李善濶 イ・ソンゼ」という友達である。ソンゼは5人の集まりの中で一番仲良しで、みんなの中でも一番活発に約束を決めたりする友達である。私が秋田に来て家族とよく連絡ができなかった頃には、家族と私の間で連絡をつながってくれたり、日本では買えない韓国の食べ物や生活品を送ってくれたりしてくれた。

他の友達とは高校1年以外には同じクラスになったことがなかったが、ソンゼとは高校3年間ずっと同じクラスだったので他の友達よりもっとさまざまなものを話し合ったので、心の深いところにある話も聴くことができると思う。

インタビューの結果

「ソンゼ」をインタビュー相手として決めた後、お互いの時間を合わせてインタビューは12月5日にカカオトークというケータイアプリの通話機能を利用して行った。

最近、お互い時間が合わなくて久しぶりに連絡がつながった私たちは少しそわついていた。インタビューは連絡がつながってなかった最近のことを話すことにつながって行い始めた。最近の話をしながら、高校の時の思い出が話題として話されたので、インタビューは私たちの思い出話を語るように自然として行った。

私が一番最初にソンゼにした質問は「ソンゼにとっての高校の友達の意味」であった。その質問にソンゼは笑いながら「少しの間の楽しみ」だと答えた。そしてその理由については、高校を卒業してみんな違う大学に入って、気がかりでつらかった生活の中で、自分のすべてを見せることができる友達と会う瞬間、その少しの間には大学生活のつらさも忘れられたと話した。これは私も理解できる答えであった。私は5人の中で、唯一に自宅通学ができない大学に入り、寮で生活した。生まれ始めて家を出て生活するのはかなり不安で、つらかった。大学で友達も

作り、生活になれた後にもその不安はなくならなかった。しかし、たまに実家に帰ってきて、高校の友達を会うとすごく楽になり、不安もなくなった。たぶんその理由は家族ではないけれど、いつも同じところで私を待ってくれる友達がいるということが、私にとってすごく力になっているからである。この話を聞いたソンゼは自分も同じ理由で不安やつらいことを忘れられると答えた。

次の2つ目の質問は「この5人の友達関係がこんなに長く続くと思ったのか」であった。私たちは高校1年から大学2年が終わるごろの今まで、私たち5人以外のいろんな友達とも付き合い、その中で誤解ができて、けんかもした。ソンゼは質問に答えながらその時はとても不安だったと話した。しかし驚いたのは、不安な状態でも、心の中で5人の仲が悪くなって会わないということは1度も考えたことがなかったというソンゼの答えであった。私たちの付き合いの中で一番不安だった時期は高校2年生の時であった。高校2年生になって2つのクラスに分かれ、新しい友達できてその友達もよく一緒に遊ぶことになったが、その友達といろんな誤解ができて、私たちの中でも少しあいまいな雰囲気の流れがあった。正直、その時私は5人の関係がつぶれるのではないかと心配した。そしてその考えは私だけではなく、他の友達も同じ考えをしていたということを後に聞いた。このようにみんなが私たちの関係について不安に考えていた時、私たちが信じながら疑ってなかったということで、ソンゼがどれほど5人の関係を大事に思っているかを知ることができた。

続いての3つ目の質問は「今まで一番記憶に残っていること」であった。この質問の最初の意図はソンゼから感じた私たち5人のことを聞きたくて、一番記憶に残っている言葉や行動を聞くつもりであったが、あの質問をした時、ソンゼが迷わずに去年(2011年)の夏休みに初めてみんなで旅行に行った時を話して、その話をもっと聞くことにした。私たちは高校3年間夏休みや、冬休みにもいつも学校で会ったので、特にどこかに旅行に行くのはあまり考えてなかった。そして大学生になった後、みんなで会える機会が少なくなって、去年の夏休みに一泊二日で旅行の計画を立てた。私たちには自ら計画を立てて行った初めての旅行だったので、すごく楽しい思い出になった。ソンゼはその時の話をしながら、「私たちは良く会うけど、カフェや食堂に行くことが多くて少しは残念だ」と話した。確かに私たちは話し合うのが好きで、会うとすぐカフェとかに入ってきた。ソンゼはみんなで話をするのも好きであるが、もっといろんな思い出を作ってほしいと話した。

そして、最後の質問は「これから5人で何をしていきたいか」であった。ソンゼはもう5人の中で3人が大学を卒業して仕事を始めたし、残りの二人も大学の高学年になったのでさらに会えなくなるかも知れないが、1ヶ月に1回はあってみんなで話し合いながら、たまには旅行を行きたいと答えた。実は、旅行をもっと行きたかったが、みんなの時間が合わないことを心配して、旅行がダメだったら、少なくともみんなで会って近状を語りたくて話した。そして、みんながもっと大人になって結婚をしたり、お祝いすることがある時など、何かあったら、みんなが一番最初にいて一緒にいてほしいと考えていた。これは以前にもみんなで話し合ったことで、5人の中で誰かにおめでたいことや悲しいことがあるときには、みんな、その人のそばでその感情を分かち合おうと誓った。私は人との関係が長くつながる人ではないので、他の友達とこういう約束をしたとしたら、ただ話しだけのことで、あまり重く考えないと思う。しかし、この4人の友達とその話をしたときには、頭の中で具体的な未来のことを考え、みんなに話していた。それはこの友達とは長くつながることができそうな予感をしたのでだと思う。

高校友達と私

私は今までさまざまな友達を付き合いしてきた。私が生まれた街での友達、幼稚園の友達、小・中・高等学校の友達、大学校の友達以外にもさまざまな形の友達がある。しかし、その中でこの4人の友達より私のことを知っている友達もいないし、さらに私から友達のことをこれほど詳しく知っている友達はいない。私は他人のことを先に聞くこともあまりないし、相手から聞いたことも良く覚えられない。こんな私だけ高校1年から今までつながっている4人のことだけは良く知っていると思える。3つ目の質問でソンゼは大学1年の夏休みにみんなで旅行を行っ

た時を思い浮かべたけど、私は私たちの中に誤解が生じてみんなが不安であった高校2年生の時、みんなで集まってお互いの本音を話し、最後にはみんなで泣いてしまったことが一番記憶に残ることであった。その時私たちは始めて自分の本音を話しながら始めて他の友達の本音を聞いた。

このレポートのサブタイトルである「フシ」はこの時言われ始めたもので、二つの意味を持っている。1つ目は「不死」、2つ目は「不良飼育場」という意味での意味である。友達が「私たちの仲は絶対終わらない！不死だよ不死！」といったことが、いつの間にか「不良飼育場」という意味を含め、「みんな違う人なので集まっているとトラブルが生じる時もあるだろうが、決して分かれることはしない。」という意味として私たちの中で使われるようになった。私はこの大切な友達とこの「フシ」の意味のように何かのトラブルが生じても高校2年の時のようにみんなですべてを話し合っ、トラブルを乗り越えながら、一生、ともに生きていきたい。

クラスについての感想

このクラスは家族以外に私の一番近くにいってくれる、その存知についても一回深く考える時間になりました。前期にも同じ授業を受けましたが、その時はグループの中でほぼすべての活動を行ったことに対して、今期はクラスの人たちと色々な話ができレポートを書くときにも役に立てたし、楽しかったです。しかし、その活動に時間が多く使われたことに対して、何人はみんなの意見を聞くことができなかつたことは、少し時間の調節が必要だと思いました。

この1年間、他の人をインタビューしてレポートを書いたり、自分の大切な人についてレポートを書くことで、少し難しいことや照れてしまったこともあったが、すごく楽しい時間になりました。この一年、ありがとうございます。